

第一次国共合作期におけるコミンテルン 軍事顧問の役割 (VI)

—— A.И. Черепанов : Записки Военного Советника
в Китае —— を中心として

滝 本 可 紀

On the Role of Advisers of Comintern in the Period of the First
Kuomintang and Chinese Communist Party Cooperation (VI)

Yoshinori TAKIMOTO

The “Paper Tiger” Insurgency

The first units of merchant troops, or “paper tigers” as they were scornfully called by the population, appeared back in 1911~1913. After the revolution of 1911~1913, Canton's chamber of commerce asked permission from the government to set up specially armed units to guard shops, warehouses and factories. These units were paid by the merchants. The merchant troops interfered in conflicts between workers and entrepreneurs and suppressed the strike movement.

10 October, the anniversary of the Chinese revolution of 1911, was darkened by the shooting of demonstrators from among the workers and many other organization in Guangzhou.

It was decided that two companies of cadets would cross over to the city. Government troops were to launch the operation on the night of 14 October. Sun Yat-sen's forces powerfully attacked the “Paper Tigers”, and in two to three hours forced them to retreat to Xiguan, the western part of the city.

Training was continued at the Whampoa School with renewed energy after the suppression of the insurgency. The Whampoa School has become a stronghold of the revolutionary government.

1924年、1月、広州に於いて、国民党第一次全国代表者大会が開かれ、連ソ、容共、労農援助の政策が決定された。孫文が目的とした民族の独立、すなわち、反帝国主義と反封建、つまり、民主的な国家の成立を実現するための政策が形づくられたのであった。しかし、この政策を実行するためには、外国の列強、及び国内の軍閥に対抗できるだけの、自己の軍隊が必要であった。

孫文自身、軍閥、例えば、陳炯明の軍隊に頼って革命を成就することの不可能さを、彼の度重なる裏切りによって痛感させられていた。中共の第一次全国代表者大会に出席した、コミンテルンからの使者マーリンが孫文と会い、自己の軍隊を持つこと、特にその基幹

要員を育てる軍官学校の必要性を強調した。

学校はソ連の資金、武器を以て設立された。そして、ソ連の軍事顧問が黄埔島に到着した。ここでは軍事教練と共に、政治教育も行われ、ここに初めて革命軍の将校が生まれることとなった。将来この中から、国民党軍の軍幹部が生まれると同時に、中共の軍幹部も生まれることになった。

1924年、5月1日に授業が開始され、同年10月10日、この日は辛亥革命の記念日である双十節の日であるが、このデモに対し広州の買弁を中心とする商人達の私兵商団軍（張子の虎）が発砲した。孫文政府は直ちに反撃に移った。黄埔軍官学校の生徒達は目ざましい働きをし、その実力をいかに発揮した。これを皮切りに、黄埔軍官学校卒業生はその後の革命の進展の中で、国民革命軍の中核となって行った。以下は

ЗАПИСКИ ВОЕННОГО СОВЕТНИКА в КИТАЕ. А.И. Черепанов, ИЗДАТЕЛЬСТВО «НАУКА» МОСКВА 1976, 135 頁 МЯТЕЖ ЪУМАЖНЫХ ТИГРОВ より 174 頁 НАЧАЛО ПОХОДОМ までの全訳である。

＜張子の虎＞（商団軍）の暴動

ツァー時代の近衛将校であった、背の高い、端正なコミュニスト Павел Андреевич Павлов は赤軍の傑出した軍事指揮官の一人であった。内戦の際、彼は各地の戦線で戦い、大兵団を指揮した。その戦功で二つの赤旗勲章を手にした。彼のかつての副官である П.В. Быков が彼のために書いた小さな本の中に、このすばらしい人物の伝記の基本的な事実が述べられている。

П.А. Павлов が中国に来て活動を始めた最初の段階から、彼が顧問団長に選ばれたのは極めて適切であったことが証明された。彼は軍事面でも、政治面でもこの職責を十分果たす能力を備えていた。Павлов はすぐに状況に精通し、我々の意見を聞き、孫文や左派国民党員、共産党員達の助けを得て、形式上は《同盟した》が、事実上は全くばらばらの地方軍閥の部隊を一つの統一した軍隊にまとめあげようと試み始めた。

彼の提案に従って、孫文を長とする軍事委員会が設立された。その委員には、胡漢民参謀長——彼のことを Павлов は皮肉っぽく《デコラティブ》と呼んでいた——廖仲愷、楊希閔総司令官、各軍司令官：広州——許崇智將軍、広西——劉震寰將軍、黄埔軍官学校長 蔣介石が任命された。広州市警察長官呉鐵城將軍は審議権を有する委員に任命された。П.А. Павlov には軍事委員会軍事顧問という正式な名称が与えられた。

М.М. Бородин は П.А. Павлов が軍事委員会を創設するのを全力を尽くして助けた。委員会活動の成功の如何は先ず第一に、それより少し前に創られた政治局がどの程度発展するか、またその政治路線がどのようなものであるか、にかかっていた。

委員会の仕事は明確に規定されていなかった。先ず П.А. Павлов の提案に基づいて、軍隊再編成の問題を解決し、又軍事訓練も行うことになった。この委員会は将来、最高戦略機関に変わる予定であった。

先ず、委員会の仕事のプログラムは次のように立案された。

1. 《同盟》軍の中に政治組織を置き、軍団や師団に党の有力な代表者を差し向けること。黄埔軍官学校に軍事—政治工作員養成の短期間コースを付

設すること。軍隊の中で、軍事行動の目的を説明する広汎な宣伝活動を展開すること。陳炯明と戦う意義を明確にすることに特別の注意を払うこと。軍隊内の全政治活動の指導を軍事委員会のメンバーである国民党中央執行委員の一人に委ねること。

2. 全ての《同盟》軍の指揮官の統一的訓練を確立すること。このために、軍関係の学校の検閲を行い、3カ月の短期訓練コースの将校再教育学校を組織すること。この学校の基本的な課題は内戦時の政治教育及び戦術的方法を統一することであった。軍関係諸学校に現存するシステムを計画的に拡充すること。各《同盟》軍から一部隊を出し、特別な訓練を施すこと。
3. 内戦期のソ連のやり方に倣って、広州を強化された地区にすること。広州にある全ての物質的資源を集計し、防衛のために利用できるよう準備すること。
4. 機甲部隊をつくること。
5. 敵の後方で、農民運動を広汎に組織すること。
6. 軍隊の査閲を行うこと。

《同盟》軍を即時、且つ完全に再編成する計画を П.А. Павлов はすぐには提案できなかった。

それを行えば、將軍達は驚いて逃げ出し、国民革命軍を創設するという希望は全て長期にわたって失われることになるだろう。当時はまだ、新しい部隊をつくるだけの条件が整っていなかった：必要とされる訓練を受けた幹部がいなかった。資材や武器は將軍達の手の中にあった。彼らは《軍隊こそ、生命である》ことを知っていたので、これら全てのものを自分達から手放したがいなかった。比較的従順な將軍達の一人に全軍の再編成を任せることはその他の將軍達の不安をかきたてることを意味していた。彼らには戦線から自分達の部隊を引き揚げることもさへ可能だった。司令官達を説得して、彼らの最良の部隊を共通の革命軍に提供させ、それらの武装を強化させ、本格的に訓練させることは容易ではなかった。將軍達は互いに敵対的な関係にあり、なかには政府を信用していないものもあった。

それにも拘らず、П.А. Павлов の軍隊再編成に関する意見は原則的には不可欠のものであった。後に黄埔軍官学校の最上級生を指揮官とする新しい部隊の編成が可能になった時、この考えはかなり実現された。

新しい将校団に対して、《同盟》軍の司令官達は傲慢な態度をとった。黄埔軍官学校によって、どのような

基礎が築かれたのか、また新しい革命部隊の意義が何であるのか、彼らは理解することができなかった。《2個連隊ばかりで何ができるのか?——これは老いぼれた孫文の、単なるお遊びにすぎない》と彼らは考えた。

《提案が出され、実際に形をとり始めるなら、我々は更に前進するであろう。》と П.А. Павлов は言った。

1924年7月15日、軍事委員会第一回会議で П.А. Павлов は先に述べた6つの提案を行い、それは承認された。彼の計画した問題を一つひとつ解決するために、いくつかの委員会が創設され、これらの委員会は次回の軍事委員会の会議にその研究結果を審議のため提出することになった。

この時まで、新たな軍事顧問達が広州にやっていた: Угер (Реми), Савновский, Чубарева (Сахновская), Шалфеев, Айтыкин (Браиловский), Шевалдин 等であった。П.А. Павлов にとって、今や、多くの未知の事柄を含む問題を解決すべき時がやってきていた。それは極めて複雑な状況の中で、出口を見いだすことであった。というのは、広州政府軍は広州から東と北に向かって延びる鉄道に沿った、狭い回廊に閉じ込められていたからである。

状況は次のようであった。

江西省では、英国帝国主義と結びついている軍閥、呉佩孚元帥の軍隊がしっかりと防備を固めていた。この省の南部、広東省との境に1個師団が配置され、若干早すぎるくらいはあったが、呉佩孚はその師団長を、督弁——広東省総督に任命した。この師団の援護の下で、呉佩孚は広東進撃のための軍隊を集結している、と我々は推定した。

譚延闓將軍の湖南軍が広東へ出発した後、湖南の督軍、趙恒惕は長沙で地盤を固め、正式にその省全体を支配していた。多数の有力な国民党組織は共通して、彼の行動に反対した。趙恒惕は湖南省を北方軍閥達の完全な従属下に置いたため、湖南省の人達は不満を抱いていた。

趙恒惕に対する戦いに、Deng Xiqin 將軍指揮下の、地方軍2個師団が差し向けられた。これらの師団の將校達は孫文と連絡をとり、彼らに大変人気のある広東政府の陸軍大臣、程潛將軍がもし、攻勢に出るなら、自分達は彼に加わって、湖南を解放するのを援助するつもりである、と述べた。

湖南と湖北の境に展開していた、4個の独立旅団もまた、程潛の軍隊が長沙を占領した後、南方軍に加わって、共に漢口攻撃を行う、と約束した。孫文から得た

情報によると、この4個旅団は装備が良く、2万1千人の兵士を擁していた。呉佩孚の軍隊によって、四川から追い出され、今や、貴州の東北部に集結していた、熊克武將軍の指揮する2万の軍隊がこの4個旅団の後に、第2梯団として、進撃することを孫文に約束した。

孫文の試算によると、漢口攻撃を行うには、全部で約7万の兵員が出撃しなければならなかった; その時はじめて、揚子江を臨むこの重要な中心地は必ずや陥落するであろう。

広西省においてもまた、状況は広州政府にとって有利なものとなった。この省の北部で、広西の督軍と、表向きは孫文の同盟者と見做されていたが、実際にはそれと大差のないほど反動的な將軍との間に内乱が続いていた。

省の南部では、李崇仁將軍が中立を守り、孫文との同盟に傾きつつあった。また、南寧を占領していた軍隊さえ、広州政府に公式に従っていた。

雲南省の督軍、唐繼堯將軍は北京が広州に対して勝利を得ると、自分の独立が奪われてしまうかも知れない、と考えた。それ故に、彼は孫文に、万一の場合は支持することを約束した。

かくて、呉佩孚は江西に於いてのみ、堅固な作戦地域を確保していただけであった。しかし、ここさえも、將軍の一人は南昌の奪取を夢見て、北伐に協力することを孫文に約束した。

沿海の省、福建では、この時まで、孫伝芳將軍と呉佩孚一味との関係は極端に緊張したものになっていた。ついに、北方で、直隸派の呉佩孚と、日本帝国主義が支持していた奉天派の張作霖との間に、戦争が始まった。

孫文は第2次北伐を組織するに好都合な状況が生じた、と考えた。(第1次北伐は不成功に終わっており、1921年にそれを企てた。)

孫文の北伐に対する作戦計画によると、二方面の攻撃を組織することが必要であった。程潛將軍及び朱培德將軍の部隊が坪石—宜章地区を攻撃し、Deng Xiqin 將軍の軍隊と一緒に、長沙及び、さらに漢口への攻撃を展開することになっていた。

譚延闓將軍の指揮下で、総計1万から1万5千の兵員を有する、統一のない部隊から成る軍隊が江西の省都である南昌を占領する目的で、南康—贛州—吉安の方角に進むことになっていた。

孫文は何故、北伐の実行を極力早めようとしていたのか。これは、軍閥の軍隊や個々の將軍間の対立を利

用して、大きな成果を収めようとした最後の試みであった。しかし、この試みは孫文が立てた主要な路線、つまり、革命思想で教育された、基本的に新しい軍隊を創ることからは、かけ離れたものであった。さらにまた、それは失敗するように、前以って運命づけられていた。再編成された革命的軍隊が決定的な役割を果たす北伐は、2回の東方出撃と1回の西方出撃で、国民革命軍が広東省の軍閥を撃破した後、孫文の死後1年余り経てようやく可能となった。

同時に、消極的な抵抗では陳炯明を撃破することができない、と孫文が考えたのは正しかった。《同盟》軍、即ち雲南軍及びそれと連合している広西軍は彼を撃破することに、全く関心を持たなかった。

陳炯明將軍の軍隊は数においては、広州軍に劣っていたけれども、戦闘能力はかなり優れていた。それと戦うためには、全力を尽くす必要があった。そうしたことが予想されて、《同盟》軍の將軍達には、この戦いに参加する気持があまり起こらなかった。というのは、戦いに成功しても、彼らには何らの利益ももたらさなかった。それどころか、今のところ《広州の守護者》という資格で享受していた特権を失う可能性があったからである。広州から離れることは、彼らには破滅を意味し、実際には自分達は単に許容されているにすぎないことを、彼らは知っていた。今のところ、孫文には彼らが必要であったが、広州軍にとっても、広州の商人達にとっても、彼らは全く必要ではなかった。前者からは収入を奪い、後者からは巨額な税金を徴収したのである。《同盟》軍と商人達、特に外国資本と密接に結びついている買弁との間柄は日に日に、悪化の一途を辿っていた。

雲南軍人や広西軍人の真の意図は全く別のものではあった。彼らは広州で巨額の収入を自由に使い、力を蓄え、自分達の省を奪還するために、東に向かうのではなく、西と北西方向に進撃するつもりであった。

孫文は北伐を計画したので、意図的に、雲南軍と広西軍を広州の東へ配置した；そうすることによって、彼らが自分達の軍閥と話を付け、政府に反対するようなことがない、また、陳炯明が攻撃を仕向けて来た時には、広州を守るであろう、という保証がある程度得られた。

広州軍の主力は陳炯明の同盟者、鄧本股將軍に対抗するため、広東省の南西部に集中していた。

かくて、まさに《同盟軍》こそが陳炯明軍に対して、最初の攻撃を加えざるを得なかった。北方、及び東方

に対して同時攻撃を組織するには、明らかに力が不足していた。全く難題であった。П.А. Павловはそれを解決する必要に迫られていた。

北伐の究極の目的は呉佩孚の撃滅でなければならない、と孫文は考えていたが、この北伐を行うためには、現状では兵力が不足している、とП.А. Павловは考えた。確かに、Павловは最終的な結論を下すのを急がなかった。それは次のような理由からであった。国民党の地区組織を通じて、湖南と湖北の境に配置されていた4個旅団の意図——彼らが本当に孫文の側に立つかどうか——を突きとめ、さらに、それらがどの程度の力を持っているかを判定するために、Терешатовが漢口へ派遣されていたので、Павловは彼から得た情報を持っていたからである。

Терешатовを北方に送ってから、П.А. Павлов自身が戦線の状況を視察するために、南東方面へ出かけた。ここ石龍で、実に馬鹿げた、悲劇的な事故が起こった。Павел Андреевич Павловは東江で溺死した。

孫文はПавловの悲劇的な死に関して、ソビエト政府に彼独得の、予言者風の電報を送った：《自由を求めて戦っている中国のために犠牲になった、最初のロシア人であるПавловの死を心から悼みます。我が隣国の共和国の勇氣ある、高潔な息子が自分の命を捧げたが、それは無駄ではなかった。このことによって、彼はロシアと中国との関係をより一層親密なものにし、民族自決を求める戦いで、勝利の結末に到達しようとする国民党の、より一層大きな決意をさらに強いものにさせた。》(Довыков, комкор Павлов, М., 1965 стр. 77)

П.А. Павловの死後、孫文は自ら北伐の開始を決定した。この間ずっと、黄埔軍官学校に於いて、軍幹部の訓練が強力に進められ、ソ連から武器が続々と搬入されていた。ソビエトの汽船が遠く離れたウラジボストクから数千マイルの距離を、大砲、機関銃、ライフル銃、その他の武器及び弾薬を積んで、はるばる広州までやって来た。船は珠江の河口近くの香港を通り過ぎた。

荷揚げはその河口の秘密の場所でなされた。その後、広州政府が強化されると、汽船は荷揚げのために、軍官学校の棧橋までやって来るようになった。航海は危険で、どんな挑発が起こるかも知れなかった。しかし、これは中国革命を成功させるためには、不可欠の事であった。また、船の乗組員達は自分達のやっている事柄が歴史的にいかほど重要であるかを十分認識していた。

10月の初旬、Сахновскийと何応欽將軍と私は最初のソ連船を出迎えるために、珠江デルタに出かけた。その船には、もう一団の軍事顧問が乗っていた。我々はタラップを昇り、船長と言葉を交わし、集會室へ降りて行った。そこで若干警戒気味の新来者達に出会った。

彼らの中に、私の古くからの友人 Тимофей Бесчастнов がいた。私は彼とは旧第14シベリア師団で、一緒に軍役についていた。私は歩兵連隊におり、彼は砲兵隊にいた。内戦の時、赤軍の第10歩兵師団で、Бесчастновは師団の砲兵隊長であり、私は第28連隊の指揮官であった。

——Тимофей、何たる奇遇。！ 私は Бесчастнов に駆け寄った。

——Саша。！ 君なのか？ 我々は君達をイギリス人と思った。

私は階級章なしの中国の軍服を着ており、もう一人の軍事顧問、Сахновскийは白い背広を着て、日よけヘルメットを被っていたことを言っておかねばなるまい。我々がタラップを昇って行った時、友人達は我々が英国の税関吏である、と判断し、本気になって心配した。

新たに到着した Т.А. Бесчастнов、Г.И. Гилев、Гмира、П. Зенек、Полло、Зильберт、Ф.Г. Манейлик、В.П. Рогачев、В.А. Степанов が黄埔軍官学校に派遣された。ここで、彼らは周囲の状況を見、我々が蓄積した経験を借りるために、短い2週間を過ごした。彼らは間もなく、広州の複雑な状況全体を感じとるようになった。広州市で《張子の虎》(商団軍)の反乱が発生した。

* * *

商団軍、これを住民達は《張子の虎》と呼んでいたが、その成立の最初は1913年にさかのぼる。1911～1913年の革命の後、広州の商業会議所が商店、倉庫、工場を守るために、特別の武装部隊を創立する許可を政府に求めた。商人達はこの軍隊に、自分達の金を払った。これらの傭兵達は強盗どもを怯えさせると同時に、民衆の行動を鎮圧することをも《兼任》していた。

反乱が始まった時にはすでに市内に、1万2千人以上の《張子の虎》がおり、省全体ではほぼ5万人いた。彼らのイデオロギー上の鼓舞者であり、指導者となったのは陳廉伯であった。彼は香港上海銀行の買弁のチーフであり、広州市商業会議所の議長であった。

商団軍は労働者と企業家との間の紛争に介入し、ス

トライキを鎮圧した。要するに、彼らは裏切り者の買弁ブルジョアジーのお傭い兵であった。

1922年7月、広州に於いて薬剤師のストライキが起こった。省長はその要求がもっともなものである、と認め、経営者達にストライキ参加者の要求を一部受け入れ、そうすることでストライキを中止させるように、指令を発した。薬局の従業員達は省長の提案した条件に基づいて、仕事を再開することに同意したけれども、経営者の方は傭兵を呼び出し、力づくでストライキ参加者を粉砕した。

同じ頃、紡績工場で長引いたストライキが行われていた。ストライキ参加者が工場からストライキ破りを追い払うために、パトロール隊を出したところ、商団軍はそれを武器で追い払った。数人の労働者が負傷した。

続いて《張子の虎》は警察と一緒に、石炭荷役労働者のストライキを弾圧し、彼らの組合を解散させ、その書類、資産全てを掠奪した。

1923年10月、石竜市に於いて、市長が商人達から商業税を徴収しようと試みた。主人達は自分の用心棒を呼び出し、税の徴収者を市の警察諸共、立ち去ることを余儀なくさせた。この衝突が起こって後、市当局は長い間、商人達から税を徴収することを断念した。

1923年3月、精米工場の労働者がストライキを行った。経営者は《張子の虎》軍を派遣した。彼らは組合の事務所を包囲し、そこで開かれていた会議に参加した人々を逮捕し、さらに銃殺すると威嚇し、力づくで無理にストライキ参加者を仕事に就かせた。

ストライキ中の労働者に対抗する商団軍の行動はまさに、広州市自身が陳炯明將軍の権力下にあった時、特に活発であったことは注目すべきことである。孫文政府の下では、広州での《虎》はそれほど攻撃的でなくなったけれども、省全体に於いては、彼らはあらゆるストライキ行動に対し、エネルギーに戦い続けていた。

これらの事実から、商団のお傭い兵との衝突の危機はずっと以前から、熟しつつあったことは明らかである。1924年2月、政府は商業会議所、並びにいくつかの地方銀行との協約に基づき、50万ドル相当の紙幣を発行し、それを軍隊に交付した。或る一つの銀行が兵士達の差し出す紙幣を受け取るのを拒否した。紛争が起こり、その結果、銀行の警備隊によって何人かの兵士が殺された。

紛争は一応、何とか一段落した。政府も孫文自身も

《張子の虎》の指導者達と平和的な関係を打ち立てるために、あらゆる手段を講じた。例えば、6月初め、文官の省長、廖仲愷、外務大臣、伍朝樞、市長、孫科、警察長官、呉鉄城が《客》として彼らのもとを訪れた。7月29日、孫文は商団軍の部隊を閲兵し、《民国13年、孫文が贈る》と書いた旗を、その部隊に手渡した。

しかし、香港や地方の買弁達は和解を望まず、商人の傭兵の助けを借りて、革命政府を打倒することを期待し、いろいろと状況を悪化させ、紛争を挑発した。

《虎》の反乱が1924年10月10日に起こった。その口実となったのは、商団軍宛に広州に到着した武器を没収する、という8月10日付けの、孫文の指令であった。その4日前に、武器購入に関する司令部の公式許可が交付されていた。しかし、その許可は武器が40日以後に到着するもの、と規定していた。この武器が早く到着しすぎたことを根拠に、孫文はそれを没収した。武器を積んだ船は捕獲され、砲艦に護衛されて、黃埔島に送られた。そこで、士官学校生徒がその武器を荷揚げした。

孫文は武器の正式な注文者である陳廉伯の逮捕を命じ、さらに彼が役人を買収して、秘密裏に武器を広州に運び入れようとしたことを理由に、彼を告訴した。孫文の指令は間に合わなかった。陳廉伯はうまく身を隠した。後でわかったのであるが、彼は広州から15km離れた、佛山へ逃げていた。そこへ、直ちに民団——地主の《自衛》軍——が集結し始めた。陳廉伯は陳炯明と連絡をとり、広州進撃を行うことで、彼と意見が一致した。

8月12日、孫文の司令部に、1,400人の《張子の虎》が武器を持たないけれども制服姿で現われ、彼らの代理人を通じて、武器押収の理由の説明を求めた。

武器は不法に広州へ持ち込まれたものであり、それ故、政府はそれを没収したのであって、返却する必要はない、と孫文は答えた。それならば、広州の全商業界はストライキを宣言する、と代理人は述べた。その場合は、労働者を武装させる、と孫文は答えた。

10日間近く、孫文と買弁達との間に交渉が続けられたが、日増しに事態は悪化して行った。

8月の下旬、富商がストライキに入った。小商人は彼らを支持しなかった。

范石生將軍（雲南軍第二兵团司令官）自ら政府と商業界との間の仲介者の役を買って出た。協約に署名がなされた。商人達はストを中止し、更に、政府に金を貸すことを約束した。一方、政府は2週間以内に、没

収した武器を返却することを約束した。原本は署名のために、孫文に渡された。

事件の解決は10月初旬までに長引いた。武器が消失した、という既成事実を商人達に突きつけるために、捕獲した武器を全て政府部隊に分配しようと孫文が決めた時があった。武器は全て將軍達各々に割り当てられ、彼らはその翌日、武器を取りに、自分達の輸送船を黃埔へ出すことになっていた。しかし、いよいよという時に、孫文は明らかに国民党右派の影響を受けたのだが、この決定的な手段を断念した。何回か会議を開いた結果、彼は武器の一部を商団軍に返却することに決めた。

10月10日——1911年の辛亥革命の記念日であるが、この日は広州に於いて、労働者や多くの組織の代表者達のデモ隊が射殺される、という暗い日になった。

その日に、《張子の虎》は黃埔で武器の一部を手に入れた：2,149丁のライフル、1,851丁のモーゼル、12万5千発の弾薬。彼らの手に戻らなかったものは2,700丁のライフル、1,000丁のモーゼル、33万発の弾薬であった。

武器は土手に運ばれた。《張子の虎》はこの時、それを手に入れるとすぐに、通りに現われた平和な労働者のデモ隊を、至近距離から猛射した。デモ隊の中にいた、黃埔軍官学校の非武装の生徒や呉鉄城配下の警官は反乱軍に対して反撃しようとした。しかし、4人が射殺され、数人が負傷し、彼らは止むを得ず退却して市中に散らばって行った。合計、約20人が死亡し、ほぼ同数が負傷した。

その後、市中の状態は極度に緊張した。政府は最初のうちは途方に暮れていた。商団軍の指導者達が市の主人となった。大商人達はストを宣言し、全ての武器の返還、及び税の軽減を要求した。政府は反乱を鎮圧する計画を立てなければならなかった。革命委員が選ばれ、河南島に委員会が置かれた。孫文はそこへ、司令部と労働者出身の民兵、及び農民軍の320名を移した。彼らは武器を手にし、3日間、軍事教練を受けた。革命委員会の指揮下にある軍司令官に、蔣介石が任命された。政府の持っていた兵力は下記の通りであった：黃埔軍官学校生徒—800名、労働者民兵及び農民部隊—320名、湖南陸軍学校生徒—220名、雲南陸軍学校生徒—500名、装甲列車部隊—250名、呉鉄城將軍の警備隊—約2,000名。

蔣介石を司令官に任命することに関して、楊希閔が

断固反対した。彼はきっぱりと言明した。《もし、蒋介石が反乱を起こしている《張子の虎》の鎮圧に加わるなら、私は黄埔軍官学校を武装解除し、蒋介石自身を銃殺するであろう。》

蒋介石はひどく驚愕して黄埔島へやって来た。そして、私を呼んで次のように言明した。私をこの学校の校長代行にしておく。もし、島や学校を防衛するため何らかの指令を必要とする時は、彼の名前でそれを出す全権を私に与える。

蒋介石が危険からこっそり逃げ出すつもりであることは明らかだった。彼がいろいろの衝突に直面した際、このような策略に訴えたのは、これが初めてではなかった。今回は、反乱が直ちに鎮圧されたこと、また恐らくあったと思われる上海からの彼の主人の指令、この両者の理由から、彼はどうか広州に留まった。

黄埔軍官学校に、14人から成る機関銃手の1チームが急いで創られ、砲兵2個中隊が準備された。山砲用の砲弾が無かったために、同口径の野砲の薬莖を短くする、という手間のかかる仕事を行わなければならなかった。10月14日——作戦行動の始まるまでに——これらの部隊は行動の準備が整った。

軍官学校生徒の4個中隊のうち、2個中隊のみが河を渡り、市中に進むことが決定され、他の2個中隊、大砲、機関銃は学校を防衛するために残されることになった。《張子の虎》に扇動された海賊が学校を攻撃する、という噂が流れていた。

珠江の主要水路方面は巡洋艦《中山号》が、南側は保壘の大砲が島を守り、南西と西側を我々は機関銃、野砲2門(旧モデルのもの)、日本の《有坂》式の山砲2門の協同作業で守った。

反乱鎮圧のために出された部隊——李濟琛將軍の第1師団、張明德將軍の第2師団、李福林將軍の第3軍、及び雲南、広西、湖南軍の若干の部隊——は孫文の指揮下にあった。彼は直接、作戦を指揮した。

政府軍の出撃は10月14日に開始された。

孫文の部隊は精力的に《張子の虎》を攻撃し、2、3時間後には、それを市の西部、西関に退却させた。この通りの狭い、人口稠密地域に《虎》はバリケードを築き、攻撃軍に強力な火力を浴びせた。

10月15日朝、呉鉄城將軍は西関に対し砲撃を開始するよう命じた。6発の弾丸が発射された。数カ所で火事が発生し、それは翌日まで続いた。お傭兵達はさらに西へ退却せざるを得なかった。彼らの退却を

妨げるべく送られた湖南部隊は自分達の使命を理解せず、市中に入った。反乱者の部隊の中には、広州からこっそり逃げ出すことに成功したものがあつた。噂によると、その一部は沙面の外国の居留地へ逃げ込んだ。退却の際、反乱軍は兵を捕虜とせず、見境なく、その場で射殺した。

政府軍の損失を正確につかむことはできなかった。150人から200人が殺されたり、負傷した、ということであった。打ち合いや火災のために、100~150人の住民が死んだ。《張子の虎》の損害は死者と負傷者を合わせて、100名を超えなかった。西関の3分の1近くが焼けた。政府軍の戦利品もまた、正確には算定されなかった。というのは、各將軍は自分達が手に入れたライフル銃の数を慎重しく報告したからである。

退却した《虎》の800名が10月20日、Sankengxu市に集まった。また他の一部は地主の《自衛》団のギャングと一緒に、第一雲南師団の部隊が占拠していた清遠を3日間包囲攻撃している間に、市の郊外にある多くの建物を焼いた。雲南の増援部隊が到着して、包囲されていた軍を解放した。この数日前に、《張子の虎》は韶関へ通ずる鉄道を切断し、軍用列車を転覆させた。

広州に対する攻撃と同時に、政府軍は佛山、及び省の他の市にいた、殆んど無抵抗の《張子の虎》を武装解除した。

孫文の革命政府はこれらの作戦を通じて、毅然としたところ、エネルギーのあるところを示した。

そのことは厚かましい商人——買弁やその主人達——香港の帝国主義者——に、真の力を持っているのは誰であるか——ということ、また国内の事柄に干渉を許さないことを示した。

孫文は直接、作戦行動を指揮し、反動派の商人達の所有物や商業地域、西関を破壊するまでに到った。

反乱の時、敗北した場合に備えて、孫文やその仲間達のために、黄埔島を信頼できる避難場所に変えるため、我々はできる限りの事をした。黄埔には、私が前に触れたように、この時、ソビエトの軍艦《Воровский》号が停泊していた。正にこの艦の上で、山砲に使えるように野砲の薬莖を短くする作業が行われた。それは我々の所に必要な口径の弾丸が無かったからであった。《Воровский》号のランチが棧橋に停泊し、その中に孫文政府の国庫があつた。というのは、反乱者達は皮肉に《張子の虎》とあだ名を付けられていたが、実際にはかなり大きな力を持っていたからである。反乱

を鎮圧したことによって、広東に革命の確固たる基地を築くことへの、重要な一步を踏み出した。

広州に《Воровский》号が停泊していたこと、これはなかなか興味深いことであった。《Воровский》号を当地に寄港させる、という指令は当時、まだかなり弱体であった我が海軍の司令部から出されたものであった。そしてそれは我々が孫文政府を断固として支持していることの、大胆な政治的デモンストレーションであった。ちっぽけな巡洋艦——実際には砲艦のようなもので、商船を改造して造ったものであった——は大胆にも、香港にある巨大な、英国の軍事基地の傍らを通り過ぎてやって来た。孫文はこの友情ある行為の意義を、正当に評価した。彼は自ら《Воровский》号を訪問した。そこでは盛大な歓迎会が催され、ソ連の水兵達と一緒に写真を撮った。

《張子の虎》が敗北を喫したことは外国の報道機関、特に香港にある英国の報道機関の、悪意に満ちたキャンペーンを引き起こした。つまり、孫文は《自分の同胞を虐殺》し、広州を略奪した、などと言って彼を非難した。英国艦隊の大砲は衝突が起こった時、広州に向けられていたが、それは革命政府を少しも威嚇できず、むしろ、それは孫文が帝国主義に対し、一貫して戦う道へ向かうことに手を貸すことになった。《英国の砲艦政策》に反対する孫文の宣言の反響があったのは、単に中国人の間だけではなく、それは《中国から手を引け》というスローガンの下に、国際的運動を生み出し、全世界の目を南中国に向けさせた。

外国、及び中国の反動的な報道機関の中傷に答えて、広州政府は10月19日、この事件について公式の説明を発表した。これに関して、《Hong Kong Daily Press》が、その後1月29日、上海の新聞《North China Daily News》が《広東の悲劇》と題して内容を掲載した。この記録書は歴史的意義を持っており、反乱の時期の状況の過程がその中で、実に明白に、且つ客観的に分析され、また《張子の虎》の主要な扇動者は帝国主義者達であることが指摘されている。

中国の革命運動に反対する戦いに於いて、帝国主義者のうち先ず第一に、英国が下男である買弁、陳廉伯をチーフとする商人の武装兵力を利用しようとした。それは英国の意志に従順な政府を広州に建設したい、と願ったからであった。

帝国主義者達がこの時、特に孫文に敵意を抱いたのは何故であったか。問題は次の点にあった。英国は北京政府と交渉して、鉄道建設の独占権、及び広東の天

然資源開発権を獲得するはずの協約を結んでいた。孫文は権力の座についてからそのような協約の批准を拒んだ。

1922年の初頭、孫文が香港で勃発した中国人海員のストライキを支持した時、英国当局は全ての中国人住民が香港を立ち去るまでは、ストライキ参加者を押さえつけていた。住居が立ち去った時、香港政府は譲歩せざるを得なくなった。孫文は続いて1924年7月14日の沙面ストライキを支持した。しかし、帝国主義者達にすさまじい敵意を呼び起こす原因となった主要なことは、南中国政府の民族—革命的性格であった。

以上述べてきた全ての事から、商団軍の反乱とその鎮圧の時期に於ける、国内や国民党員間の政治的状況の有様を描くことができる。帝国主義者、買弁、右派国民党員は中国共产党や国民党内の左派との戦いで、共通の言葉を見いだした。彼らは《赤の脅威》という叫び声で小ブルジョアジーを脅かし、《無政党政府》という考えを提起した。

《張子の虎》を撃滅した後、広州政府が直面した問題は民族ブルジョアジーと買弁との間に楔を打ち込み、陳廉伯のような帝国主義の走狗の手から、民族ブルジョアジーの比較的良い部分をもぎ取ることであった。広州の商人達と帝国主義者の香港との間には、少なからぬ矛盾があった。これらの矛盾の本質を民族ブルジョアジーに明らかにし、民族の利益のために香港と戦うように仕向けることが必要であった。そして、これはかなりの成功を収めた。決定的な瞬間に、政府は民族ブルジョアジーを解放運動の道へと導くことができた。

反乱を鎮圧した後、黄埔軍官学校では、より一層エネルギーに教育が続けられた。Павловが到着すると、私は軍官学校の先任顧問となった。私は自分の経験を全て、中国の友人達に伝えようと努力した。明らかに、我々の努力は無駄ではなかった；それについてПавловとБлюхерの見解を二つ引用しよう。П.А. Павловは次のように書いている：《この学校の政治工作は最近始まったばかりであるが、国民党支部の開設や文化教育工作のとりまとめはすでにでき上がっていた。これは素晴らしいことである。生徒達は政治的諸問題に積極的に関心を示している。そこで、学内の党生活は恐らく、活発になるであろう。黄埔軍官学校は革命政府の拠点の一つになった。》

В.К. Блюхерは1924年11月、広州に到着して黄埔の活動状況を視察し、次のことを確認した：《この学校

はその存在理由を十分に示している。そこでは、他の軍官学校の生徒よりも、理論的にも専門的にも訓練がよくなされており、政治方面にも知識のある将校を卒業させている。この学校は他の学校の手本となっている。私がすでに述べたように、第一期卒業生を基礎として、国民革命軍の最初の2個連隊が編成された（この件の顧問はB.A. Степановであった）。この部隊の政治的指導者となったのは中国のコミニスト達であった。

革命的な軍の基幹要員を養成する際、我々は当時軍隊にいた少数の中国のコミニスト達と、できるだけ接触を持とうとした。以後の展開が示しているように、コミニスト達こそが国民革命軍の果敢な前衛となり、最良の、最も勇敢な戦士となった。コミニスト達は軍官学校の生徒の中にいて政治工作にも積極的に参加した。国民革命軍の将校の基幹要員の中のコミニスト達の訓練は孫文の国民党に中国共産党が加入し、長期にわたって両党が合作したことによって生まれた、最も重要であり、積極的な成果の一つであった。この黄埔で、現代の戦争技術に関して初めて手ほどきを受けたのは人民解放軍の、未来の多くの傑出した司令官達であった。彼らはその後、革命が敗北に終わった後、ソ連の士官学校、及びその他の軍関係の学校で学んだ同志達と共に、ゲリラ地区の軍事指導者の中核となった。国民革命軍の黄埔、及びその他の軍関係の学校で、中国共産党の軍事要員を訓練する、という極めて重要な段階が無かったら、ゲリラ地区には専門知識のある指導者は存在しなかったであろう。さらにまた、新軍閥の国民党軍の圧力に対して、抵抗できなかったであろう。黄埔でコミニスト達が教育されたことには、大きな意味があった。何故なら、当時、若い共産党は未だ数の上で弱体であり（この巨大な国全体で数百人）、政治的にも極めて未熟であったからである。あらゆる種類の偏向主義者が長い間、党内で指導的役割を果たしたのは、後者の理由からであった。

黄埔での仕事に関係していた中国のコミニスト達の中で、最も傑出していた人物の一人はYun Daiyingであった。彼は1926年、この学校の政治インスペクターの主任となった。彼は中国の共産主義運動に於ける、最もポピュラーな英雄の一人であった。彼は闘争に於いて、類い稀な不屈の精神を見せた。Yun Daiyingは最後まで革命に忠実であり続け、その後衛の戦いに参加した。張太雷が指導した広東コンミュニンの時、彼はその総書記になった。革命が敗北した後にも、

彼は中国最大のプロレタリアートの中心である、上海の労働者地区での非合法活動を続け、そこで逮捕された。彼は南京の国民党の刑務所に投獄されたけれども、気を落とさず、逆に革命のために尽くした：重要な理論的な著者を書いた。しかし、裏切り者が彼の本当の名前を暴露したために、彼は処刑された。極めて厳しい状況の下で、このコミニストが革命に対する不屈さと確信を示したことはなかならず、我々軍事及び政治顧問達の影響が確かに有益であったことを如実に物語っている。

Yun Daiyingの英雄的な人生は全て、勇氣あるコミニストの、確固たる信念をもった国際主義者の人生であった。1921年、彼が立てたプログラム《協同の社会》の中に、すでに《ソビエト・ロシアの支持》という事が含まれていた。彼は20年代、革命の基幹要員を育てた上海大学で仕事をしながら、確かに瞿秋白と密接な接触を保っていた。瞿秋白は我々の国にやって来たことがあり、中国の印刷物の諸ページで、十月革命の歴史的意義について、他の誰よりも明白に語っていた。

我々の同志達はYun Daiyingの非凡な革命的資質を、その功績によって時機を失せず評価した。彼は武昌の軍事政治学校の校長のポストに抜擢された。それは華中に於ける黄埔軍官学校の後継校になるはずであった。しかし残念ながら、革命の敗北のために、この計画は挫折し、生徒達にできたことは反革命の反乱の一つ、夏斗寅の行動を鎮圧することにめざましい役割を演じたことぐらいであった。Yun Daiyingは葉挺の《鉄軍》の指揮官と共に、反撃を指導した。

黄埔軍官学校で蒔かれ、中国共産党によって養育された種子は新たな芽を吹き始めた。革命の更なる前進のための、他の積極的な要素もまた生まれてきた。

孫文の忠実な同志、廖仲愷は最終的に、譚延闓將軍と程潛將軍を長とする湖南軍や許崇智將軍を長とする広州軍の一部、及び朱培德將軍の軍団を政府側に引きつけることができた。

コミニストが国民党に加入した後、彼らの最も重要な任務の一つになったのは広東、及び湖南両省に於いて、労働者、農民の大衆運動を組織することであった。特に広東では、共産党が第一次東方出撃までに、農民の間に広汎な扇動——宣伝工作を行い、陳炯明の後方で農民組合を創り、ところどころでそれらを武装化した。

それにも拘らず、南中国、広州の組織化された大衆

の声は《5.30 運動》及び大規模な香港—広州ストライキが始まって初めて、本格的に有力なものになった。これ以前には、個々のストライキはあったが（広州の沙面の居留地やその他で起こったストライキ）、極めて後進的なプロレタリアートが小企業に、その大部分は家内工業に分散していて、広東省の政界の有力な要素にはなり得なかった。プロレタリアートがかくも急速に成長し、強固になったのはコミンテルンが打ち立てた、統一民族革命戦線という正しい路線と孫文の進歩的政策の成果であった。

1924 年 10 月、Василий Константинович Блюхер——中国人達は彼を《Галин 將軍》と呼んでいた——が軍事顧問団長として広州に到着した。彼の到着は中国革命の第一期——革命勢力の結集と配置の完成——と一致していた。

広東の解放

第一次東方出撃

出撃を前にして

Василий Константинович Блюхер は Рыбинск 市の近くにある村の貧乏な家庭に生まれた。彼は若い時、Мытищин 車輛工場のストライキに参加するよう呼びかけたという理由でツアーの警察に逮捕され、3 年間刊務所に入れられた。

第一次大戦後、Блюхер は兵士、続いて下士官となり、重傷を負って、1915 年軍隊から解放された。1916 年、彼はロシア社会民主労働党に加入した。

Блюхер の名前は内戦時の、数多くの、今でも語られている出撃や勝利と結びついている。ウラルの白衛軍のコサック部隊の後方で、彼は、40 日に亘るバルチザン部隊による急襲を指揮した。彼はまた、Каховка, Перекоп, Волочаевка の戦いを指揮した。Василий Константинович は 1918 年 11 月、ソビエト共和国で赤旗勲章を授与された最初の人となった。1921~1922 年の間、彼は最高司令官であり、陸軍大臣であり、また極東共和国の軍事委員会議長でもあった。

彼が中国へやって来るまで、黄埔軍官学校で仕事をしている我々顧問達の中には、彼と出会ったことのある者は誰もいなかった。Блюхер は仕事の上で厳しく、厳格な秩序を愛していることで知られていた。Василий Константинович は広州に着いた後すぐに、我々みんなを自分の所へ呼び寄せた。

我々は指定された時刻までに、彼の所へ行った。一

分後に Василий Константинович が現れた。彼は我々を横から吟味したいかのように、ドアの所に立ち止まった。兵士のように直立不動の姿勢をとりながら、我々は中背の、がっしりした、灰色のスーツに身を包んだ人物を注意深く眺めた。私を驚かしたのは濃い毛深い眉毛の下にある灰色の目の、厳しい、いわば一切を見るまなざしであった。

我々が自己紹介をした後、В.К.Блюхер はそれまで自分が得た観察の結果を我々に伝えた。時々、彼は我々に極めてさまざまな質問を浴びせた。それは既に自分の得た推論が正しいことをチェックしたいが為のようであった。我々は懇談の性格に少し驚いた。黄埔軍官学校について我々が用意していた報告を、何故、Блюхер が先ず最初に聞かなかったのか、その理由が我々には理解できなかった。後になってはじめて解ったことであるが、彼は必要な実際の情報を、広州にある顧問団長の事務所ですでに手に入れていた。

その後、我々は Блюхер の仕事のやり方の真価を認めるようになった。彼は何か作戦上の決定を下す前に、我々の全般的な考え方に耳を傾けることは決してしなかった。その代わりに、彼は自分に代わって解決すべき個々の問題を、我々全ての者に割り当てた。具体的な問題に関して、Блюхер は中国人の工作員の意見を求めた。全ての情報を集めると、Блюхер はそれらを注意深く研究し、その後決定を下し、それを実行するように我々に告げた。

最初のうち、我々は腹を立てさえした：何故、この顧問団長は決定を下す前に、《古年兵達》の意見を聞こうとしないのか。しかし、東方出撃が始まるとすぐに、我々がこのように立腹することは根拠のないことである、と解った。Василий Константинович は人並みはずれて豊かな軍事的才能を持ち、真の先見性の資質を持っていた。

《戦争全体、及び個々の作戦は先ず第一に数学であり、計算である》と彼は言っていた。Блюхер はあらゆる利害得失を計算し、計りにかけることに、とても優れていた。第一次東方出撃に要する時間、及び北伐時の武漢占領を行った日は彼の予定したものと 2、3 日しか違わなかった。

Блюхер は初めて我々と懇談した時、次のように尋ねた：

——1 人の生徒を養成するのに必要なコストはどの程度か。

我々はこれに答えることができず、前任の顧問団長

はこうした事柄を究明することを禁じていた、と言いついた。

——しかし、諸君自身が十分知っての通り、——Блюхерは異議を唱えた。——黄埔軍官学校を設立するに際して、孫文博士は資金も武器も持っていなかった。今や、学校を拡張する問題が提起されている。このために必要な追加資金の額については、私は中国の将軍達の言をそのまま信用せざるを得ないけれども、私としても計算に参画しなければならない。それ故、諸君は自分が顧問になっている学校や連隊、さらに軍団の経済面を詳しく知らねばならない。そうでなければ、我々の助言は完璧なものにならなくなるだろう。——

我々がすでに知っているように、Блюхерが到着するまでは、孫文政府の支配地域はわずかに広東省の3分の1にすぎなかった：広州—韶関間の鉄道に沿って、北から南へ延びる回廊、珠江、及び西江と東江のデルタ。その省の残りの地域は陳炯明将軍、及びその同盟者の軍隊に占拠されていた。

全般的な軍事や政治状況を決定していた、主要な要素は商団軍の反革命反乱の敗北と直隸派、呉佩孚と曹錕両者の敗北から生じた、北方に於ける政治状況の激変であった。北方からの、即ち呉佩孚軍からの脅威はしばらくの間、取り除かれた。その頃、孫文と絶えず動揺していた彼の《同盟者達》との間に、表面上の統一が成立した。《張子の虎》に対する勝利と、彼らのボス陳廉伯の逃亡は広州政府の立場を強め、反革命的な商人達の士気を挫いた。

敗北を喫し、武装解除された反乱軍の部隊は広州から退却し、地主の民団に合流した。彼らは政府に対する攻撃を組織しようという、無益な試みを始めた。次第に、《張子の虎》は広東省全体に散らばり、中には広州に戻って来たものもあった。

広東の戦線は状況が若干安定した。陳炯明は経済的困難を感じ、自分の陣営の、争っている将軍達を和解させようとした。こうしたことから、彼はしばらくの間、鳴りをひそめざるを得なかった。

東部戦線は雲南軍と広西軍が守っており、その一部を広州軍が受け持っていた。その総兵力は約2万であった。

羅定—一思平の線に沿った南西戦線を守っていたのは広州軍の第3師団の諸部隊であった(兵員約3千)。これに対抗して集結していたのは鄧本股将軍の8千人の軍隊であった。この陳炯明の味方は広東省の南西部を

支配していた。省の西部はLin Qinting 将軍の手中にあり、彼は広州政府を支持していた。

これを利用して、孫文と広州軍司令官、許崇智将軍はLin Qinting 将軍と協議し、共同作戦をとることにした。そして彼に資金、武器、弾薬を与えて支援した。鄧本股の軍隊を攻撃し始める際は、Lin 将軍が背後からそれに打撃を与える、と約束した。一方、広州軍の方でも必要な場合には、同じようにLin Qinting の軍隊を助けることになっていた。従って、戦線のこの地域ではバランスがとれていた。

西部戦線は梧州から北に向かって、広西省との境を走っていた。西江のほとりにある商業都市、梧州は広州軍第1師団の支配下にあった。広西の東部は二人の将軍の軍隊が占拠しており、彼らの勢力範囲は西江に沿って分けられていた。二人の軍閥は孫文に対して、友好的中立の立場をとっていた。

広東省に《同盟軍》が集中していること、そしてその維持費がその地方の住民に、重い負担となつてのしかかっていることが困難な経済状態をつくりあげ、広州政府から収入源を奪っていた。

孫文は北方遠征を実現するため、直隸派と奉天派の軍閥間の敵対心を利用しようとした(この章で扱われている北方遠征は1926年～1927年の国民革命軍の北伐と区別しなければならない)。北方遠征に向けての準備、及び韶関地区に軍隊を集結させることが9月に始められた。それはБлюхерが到着する以前のことであった。

孫文は広東の北にある諸省から以前に広州へやって来ていた部隊を北方遠征に割り当てた。それは次のようである。

譚延闓の湖南軍	9,000
方の河南軍	5,000
程潜の部隊	1,000
江西、福建、その他の省の兵士が 集まっているいくつかの小部隊	3,000
呉鉄城の警衛隊	2,000
朱培徳の雲南部隊	3,000
合計 23,000 名	

最初の2つの軍隊は東部戦線から転進し、虎門—順徳—陳村の線の西に移動して来た。この編成変えの結果、恵州市の包囲は解かれ、東江デルタにある町、博羅や石竜を含むかなりの地域が敵の手に渡った。石竜は東江によって二分されている戦線を連絡する地点として、重大な意義を持って

いた。

9月の後半、北方遠征のために指示された軍隊の大部分が韶関地区に集結し終わった。孫文は自分の幕僚を連れてそこへ、出かけて行った。

その間に、北方で軍閥間に公然たる戦いが起こり、その結果、直隸派と奉天派との間に決定的な分裂が生じた。奉天派の首領、張作霖は北京政府に対し公式に戦争を宣言した。両者は動員を急いだ。呉佩孚は湖南と江西の軍隊の一部を移して、兵力を北へ向けた。このように兵力が移動した結果、湖南、江西、四川の諸省の若干の軍閥は孫文の政府に進んで従うことを表明した。

このような北方に於ける全般的な軍事政治状況から、直隸派に反対する活発な攻撃が起こることが十分予想された。

孫文が韶関への視察旅行を終えた後、二方面で攻撃を展開する決定が下された。第一は——湖南省を通して武漢へ。第一方面のグループには1個連隊と軍官学校生徒2個中隊で編成されている程潜將軍の部隊、そしてその時すでに4,900名の兵士を数える雲南の將軍朱培徳の部隊が入ることになっていた。第二方面のグループに江西省占領の任務が課せられた。攻撃は贛州、さらに北方へ向けて展開することになっていた。この計画は早くも10月に実行の開始を見るはずであったが、その時資金が不足していたことや《張子の虎》の反乱が起こったために妨害された。

買弁の商人達に譲歩することによって《虎達》との衝突を解決しようとしていた若干の將軍達のあいまいな態度のために、孫文は北方遠征隊の一部と呉鉄城の警察軍を広州に移動せざるを得なかった。

北方にクーデターが起こり、また英国帝国主義と結びついていた呉佩孚派が決定的な敗北を喫した後、孫文は軍隊に向かって演説し、北京に出かける決意を述べた。北方の軍閥達の連合という形をとった新しい政府が北京にできることを、孫文は妨害したいと思った。彼らの首領、段祺瑞は孫文に電報を送り、中国中央政府創設について協議するため北京へ来るよう孫文を招待した。出発を前にして、孫文は全国会議の召集に関する自分の要求を盛り込んだ宣言を出した。11月13日の孫文の見送りは巨大なデモンストレーションとなった。

孫文の政治的使命は広東での軍事的成功があって初めて果たされるにちがいがなかった。ずっと以前に、東部戦線で敵に対して決定的な打撃を加えることができたにも拘らず、この作戦を実行する手段は取られなかった。

北京の状況が不安定だったこと、また広東省に隣接している諸省を支配していた將軍達の気持が混乱していたことはこの東方出撃にとって好都合であった。広西省の北東部を占拠し、以前に孫文に対して好意的中立の立場をとっていた Sheng Hongyong 將軍は自分の立場をもう一度裏付けするために、軍事援助を申し出た。Feng Qing Ying 將軍は江西省の督軍を攻撃すること、広州政府側に移ることを孫文に通告してきた。陳炯明の最も有力な同調者林虎將軍との関係がついた。彼は自分のパトロンを裏切ることに異存はなかった。

同時にまた、陳炯明が広州を攻撃する準備をしている、という情報がますます頻繁に届き始めた。彼は汕頭に逃げた《張子の虎》のリーダー、陳廉伯からかなりの金銭的援助を受けていた。陳炯明は攻撃のための資金を調達するために、汕頭の商人達に40万円の公債を割り当てた。広州では、この事をあまり重要視しなかった。しかし、状況を考えてみると、それは可能性のある情報だった。陳炯明一派の内部では衝突が続いていた。特に、強い不満が上述の公債の配分から生じた。第4師団の師団長 Hong Shao Lin 將軍がその最大の分け前をとろうとしていた。この事は林虎將軍の激しい抗議を呼び起こした。彼は商人達に、しばらくの間金を出すのを控えるように要請した。それほど気前よくもない商人達は喜んでこの要請を受け入れた。

孫文が上海へ、次いで日本へ旅行したことは11月前半の主要な出来事であった。国民党の右派は自分達の利害関係から、党の指導者の日本訪問を利用しようとした。広州では、種々の日本の特務機関員が公然と活動していた。孫文が北京で協議した結果、中央政府が成立し、それが反日の立場を取ることを彼らは警戒していた。日本の特務機関員達は広州政府の指導者達や軍司令官、許崇智將軍の所にしばしば出入りをした。後者は日本の帝国主義的政策に対し、数日前に抗議の演説を行っていた。許崇智は В.К. Блюхер に出会った時には、《日本の友人達》と会見したことを大喜びで

彼に語り、彼らと知り合いになるように勧めた。司令部や黄埔軍官学校にいる右派国民党員達は喜びを隠しきれず、日本人教官が黄埔へ来校する可能性を検討していた。孫文が日本へ行くことは時期を失っており、また危険であることを、B.K. Блюхерは許崇智と胡漢民に立証しようとしたが、それは不成功に終わった。逆に、Блюхерはこの旅行が中露両国の利益に役立ち、それはまた、北方軍閥のグループとの戦いで、孫文の立場を強化するものであることを納得させられた。

政府と右派国民党のグループは孫文が天津に到着するまでは、この親日的な気分浸っていた。その後、親日的熱狂はだんだん減少し、12月の前半には酔がさめ始めた。

これらの政治的議論の故に、政府はしばらくの間、攻撃の準備に関連する諸問題を避けることになった。孫文の出発と共に、政府が《一枚板》であることは更に根拠のないものになった。彼の代理人となった胡漢民は権威を持っていなかった。政府の臨時の幹部会——指導的な責任ある5人組——は一度開かれただけであった。孫文に代わって北方遠征の指揮をとっていた譚延闓將軍は間もなく韶関へ出発し、例によって金銭の支出を要求する目的だけで、一度広州に現れた。

B.K. Блюхерの提案に基づき、胡漢民と許崇智と雲南軍司令官、楊希閔將軍が東部戦線の状況を審議するために会議を開いた。B.K. Блюхерは東方出撃に備えてすぐに準備を行うよう勧めた。しかし、この会議の参加者達は原則的には東方出撃の必要性に同意したが、軍資金が無いこと、雲南第2軍長范石生の態度が疑わしいことを指摘した。彼らの意見によると、范は政府に反乱する気持を抱いていた。政府に忠実な部隊が東方へ出撃することによって、范石生が広州を占拠する恐れが生ずる、と彼らは考えた。英国や買弁達に扇動されて、范石生は陳炯明の圧迫を受けた場合はすぐさま、自分の部隊を広州に移動させ、地方の《自警》団や《張子の虎》の散らばっている敗残兵と連合する可能性があった。会議の際に出された問題は范石生部隊を監視すること、そして必要な場合には、それらの部隊を武装解除することであった。自衛計画が作成され、范石生の挑戦的な行為を時機を失せず妨げることができるように、部隊の再編成が行われた。

このようにして、11月の終わり、東部戦線での攻撃に関してБлюхерの出した提案は却下された。

この頃までに、広州の状況は悪化していた。陳炯明は自分に従っている部下の將軍達の間にあった軋轢を、ある程度和解させることに成功した。汕頭の軍事会議で、広州を攻撃する問題に関して公然と、議論がなされた。予定された出撃の最高司令官として陳炯明が任命された。商人達はすぐに彼のもとへ、《赤のボルシェビズム》から市を解放して欲しい、という請願を持たせて使いを派遣した。そして、彼を支持すること、また金銭的援助をすることを約束した。広州では、秘密の会議で市中の商団軍復活の決議が採択された。孫文の統一に関する宣言を強く非難した香港の新聞は今や、広州政府に対し公然と反対の論調をとるに至った。英国人達ははっきりしない將軍達を買収するために、いろいろな手を打った。范石生將軍は領事達の歓迎会の席で大声で演説した。国民党中央執行委員会の農民政策は危険である；商人達と断絶したことは党及び政府の極めて大きな誤りである、と彼は言明した。それ故、自分、即ち范石生は雲南へ出発する以外に道が見いだせない。この事を口実に、范石生は直ちに自己の軍隊を、東部戦線を守っていた広州軍の背後に集中した。

この頃、廖仲愷と許崇智は范石生が信用できない、という事について一層頻繁に話し合いをした。そして、一連の特別な会議を開いた。買弁商人の支持を得ていた広州第3軍長李福林將軍は農民組合が民団と戦うに際して、前者を支持するように、という許崇智將軍の要請を実行するのを拒絶した。

これに加えて、広州政府内部での矛盾が深まった。農民問題に関する政府の政策に対する国民党右派の不満は公然たる形をとった。各將軍が指揮していた《同盟》軍は自分達の占拠していた地域から収入を絞り取るために、手段を選ばなかった。そして、広州政府には端金しか残さなかった。よそ者の將軍達は広東に自分達が存在するのを国民党政府が大目に見ているのは、単に政府が軍事的に弱いせいだけであることを知っていた。彼らは政府軍を再編成すること、また黄埔軍官学校に新しい師団をつくることを恐れていた。こうしたことは全て范石生將軍や彼の周りに集まっていた雲

南の將軍達の態度に、はっきり反映していた。

かくて、11月に、譚延闓將軍は孫文の指令に応じて北方遠征の準備を完了し、出撃のために必要な軍需品を韶関に集積した。

11月20日、程潛將軍の湖南軍が韶関から北へ向かって坪石、さらに宜章市へ進撃した。宜章はさして苦勞なく占領された。しかし、更に進もうとした時、程潛は思いがけず湖南兵からの抵抗を受けた。

程潛將軍と譚延闓將軍の二人はいずれも湖南出身であったが、両者とも湖南省で指導的役割を果たすつもりであった。そして、互いに相手の成功を嫉妬していた。譚延闓が雲南の朱培徳將軍の部隊を程潛の部隊に加えなかったことはこれによって説明できる。政府に対する責任感、また作戦の成功にとって、団結が重要であることの理解が個人的動機に優先すべきではなかったが、そうはならなかった。結局、予定された攻撃は駄目になった。

Feng Qingying 將軍は江西から孫文に電報を送り、自分が孫文に加わることを、彼の命令を実行する用意があることを知らせてきた。そして地方軍閥の軍隊を撃破し、12月16日、江西省の首都、南昌を占拠した。

12月1日、譚延闓は攻撃に転ずることを決定した。彼は最後に、朱培徳將軍の部隊を主力に加え、その部隊を前衛にした。朱培徳將軍は戦わずして、12月7日に新城、12月8日に南康、12月9日に贛州を占領した。間もなく北方遠征の全軍が贛州に集結し、そこへ12月15日、譚延闓の司令部が移転してきた。Feng Qingying 將軍は突然、北方遠征の中止を要求し、彼が以前に孫文に示した忠誠心の保証は当てにならないものであることを表わした。

譚延闓は自分の軍隊を北方へ進めた。その軍隊は吉安市に近づき、この安福河の渡し場で Feng Qingying 將軍の軍隊と交戦した。

しかし、この時、戦況を根本的に変える事件が起こった。12月20日頃、陳炯明の同調者である林虎將軍が指揮する旅団の一つが县城、梅県から移動してきて、北方遠征軍の背後を攻撃する目的で、江西省東部に進入して来た。北方遠征軍の背後に、全く思いがけず趙恒惕將軍の湖南軍の1個旅団が出現したため、広州政府軍は大至急、南方

へ退却せざるを得なかった。

数日間、北方遠征軍との連絡が断たれた。1月2日、撤退軍の一部は広州に、一部は広州の北西35 km の Sui Chuan に集結した。同日、譚延闓將軍は電報で、軍は算を乱して退却した、と本部に伝えてきた。湖南の部隊は自分の省に帰りがかった。北方遠征軍の損失がどの位大きかったのかを、すぐに確かめることは不可能だった。軍隊が退却中に武器を放棄した場合、過去の経験から判断して、北方遠征軍はたとえ兵員ではないにしても、兵器の面で巨大な損失を蒙った、と Блюхер は推測した。

1月3日、軍事会議で現状を討議し、3つの提案が出された：兵士の要求を受け入れて北方遠征軍の一部を湖南に移動させること；遠征軍を韶関に戻すこと；江西省にいる遠征軍は贛州地区に留まり、そこで防備を固め、軍の隊伍を整頓し、将来、陳炯明將軍の軍隊が攻撃を仕掛けて来た時、梅県地区でその右翼を叩くか、或いは必要ならば、贛州から南へ直接向かうこと。

軍事会議は В.К. Блюхер が出した第3の提案を採択し、それに応じた命令が直ちに譚延闓將軍に伝えられた。

今や、次の事が明らかになった。Feng Qingying 將軍は南昌攻撃の前に、陳炯明とも又林虎將軍や趙恒惕將軍とも直接、協定を結ぶことができた。そして、孫文との彼の文通はすべて全くの巧妙な策略にすぎなかった。

この間、Fang 將軍の河南軍が攻撃に移る前にすでに、北方遠征軍の構成から離れていた。12月の初旬、それは山道を通して北、通城の町（湖北省）に向かい、それから安徽省を通して、12月下旬開封に到着した。

この時、西部及び東部戦線の状況が緊迫した。

12月の末頃には、西部戦線の安定性が著しく損われた。広西の督軍 Sheng Hongyong は省の北東部と桂林を握っていたが、12月下旬、自分の軍隊を梧州の方向へ移動させた。この編成変えの目的を理解するのは困難だった。Sheng Hongyong 將軍は言葉のうえでは、昔からの孫文の信奉者であり、度々彼を助けたけれども、また何度もいとも簡単に彼を裏切った。最終的に、彼は1924年の春、孫文の側に移った。この場合、彼は梧州を占拠し、この穀倉地帯から広州を駆逐しようとし

ていたことが推察できた。北方遠征の敗北によって生じた、南方政府にとって不都合な状況、及び陳炯明將軍の予期された攻撃から、この推定は一層正しいものに思われた。それに加えて、広西の省の会議は段祺瑞を支持する決議を採択し、孫文の宣言に加わることを否決した。

次のような現実的な脅威が存在していた。すなわち、Sheng Hongyong は梧州の占拠に止まらず、この軍閥の行動は広州政府を無きものにするという全体的な計画のほんの一部にすぎない、という脅威であった。この場合、Sheng Hongyong は広寧地区の緊張した状況を利用することができた。そこでは、すでに数週間、政府の支持する農民組合が地主達と武装闘争を行っていた。こうなると、第3師団の数部隊は羅定地区から転進せざるを得ないであろう。敵は広寧地区に対する支配を確立した後、広州―韶関間の鉄道を切断することができた。

広州への進撃を準備していた陳炯明の行動を、我々は12月中ずっと綿密に観察していた。陳炯明がこのために、広州の商人や香港から巨額な資金を手に入れていたことは明らかだった。陳炯明が11月に入手できなかった40万元の借入金の交渉が再び始められた。汕頭―福州、及び汕頭―Shanwei(ここに兵器庫があった)地区で道路の改修作業が行われた。陳炯明は汕頭の西に散在している自分の師団を廻り、たとえ数時間でも仲違いしないよう將軍達を説得した。スパイの情報によると、彼が話をつけることができたのはただ林虎將軍のみであった。遂に12月20日、敵が西へ移動し始めた、という最初の情報が手に入った。

防禦用の要塞建設を担当していた許崇智將軍はこの作業が大至急完成するよう要求した。そして、広州を直接取り巻く防衛ラインをつくる、というБлюхерの提案に完全に同意した。朝から夜遅くまで、土地の下検分が行われた。3日間、В.К. Блюхер と許崇智將軍は塹壕をつくる場所を示す最終的な線を描きながら、広州を取り巻く丘を一つひとつ上った。建設された要塞に向け、直ちに道路がつけられた。この間、蔣介石は広西軍の抵抗力を信頼していなかったため、虎門島へ歩兵1個連隊を移動しようとした。Блюхер は兵力の分散につながる、この時期尚早の行動をとらないように、彼を説得するのに大変苦労した。その

結果、それは中止された。許崇智將軍と蔣介石將軍、それにВ.К. Блюхер は東部戦線に出かけ、第7独立旅団の査閲を行った。許崇智は兵士達の前にして次のように演説した。中国はソビエトロシアと同盟し、帝国主義やそれを支持している人々と闘争する場合にのみ、革命を成功裏に遂行することができる。

12月25日、陳炯明は特別電報で広州の商業会議所に、自分が最高司令官に就任したことを知らせてきた。その中で、自分は広州の商人達の再三にわたる請願を受けたので、商業会議所の助力を当てにして、攻撃を開始し、広州を解放することに決めた、と述べていた。これより一週間前の12月18日、胡漢民との会談でВ.К. Блюхер は国民党中央執行委員会の下にある軍事委員会に指揮権を集中するための手段を至急とるように、だが、それに先立って將軍や師団長の拡大軍事会議を行うよう要請した。

その会議は22日に行われた。東部戦線の最高司令官に雲南軍の司令官楊希閔が選ばれた。彼は防衛だけでなく、汕頭攻撃の計画を作成することに関わる全ての問題を解決するよう任された。この会議で、全部隊が楊希閔の命令に無条件に従う、という決議がなされた。

范石生將軍は会議には出席しなかったが、部下の参謀長を通じて、自分は政府の諸決議を実行すること、また陳炯明に対する勝利が確保されるまでは広東を去らないことを知らせてきた。

12月24日、廖仲愷、胡漢民、В.К. Блюхер の参加した会議で、廖仲愷、胡漢民と許崇智、蔣介石、楊希閔の三將軍をメンバーとし、В.К. Блюхер を顧問とする軍事委員会がつくられた。

楊希閔に自分の行動を軍事委員会に報告する義務を課した。

12月26日、軍事委員会第1回会議が開かれた。そこで楊希閔に求められたことは、全ての軍隊からその即戦能力に関する情報を手に入れること、及び東部戦線防衛計画と攻撃計画を完成することであった。入手した情報に基づいて、最高司令官は各部隊をいくつかの軍団にまとめる計画を立てることになった。

5千から6千を下らない兵員から成る、一般的な予備軍を広州地区に組織することが計画された。陳炯明に対して上陸作戦を行うために、数隻

から成る特別海軍部隊が創られた。情報機関の要員は総司令部が集中的に管轄することに決まった。兵士や住民の間；特に農民と労働者の間に広くアジェーションを行うことに重きがおかれた。国民党中央執行委員会は軍隊内の政治工作のために、また反対宣伝のためにアジェーターを送ることを約束した。後者は陳炯明軍内と戦線付近の農民の間に宣伝ビラを配布することであった。

軍事委員会第2回会議が12月30日に開かれた。委員会のメンバー以外に、劉震寰將軍と書記として伍朝樞が出席した。楊希閔が作成した計画が検討された。

攻撃の計画によると、汕頭への進撃は3列の縦隊で行われることになっていた：北方——東江に沿って河源を経由、中央——惠州を経由し Hebo に向かって、南方——沿岸地帯に沿って。北方縦隊は広州軍(兵員1万)、中央は広西軍(兵員1万)、南方は雲南軍(兵員1.5万~1.8万)。雲南軍に割り当てられた戦区は汕頭へ最も近く、比較的良好な道路網があった。そのおかげで彼らは Shanwei のかなり大きな兵器庫のある、また汕頭の豊かな地区を有する沿岸地区を占拠することが可能になった。そしてそれによって、攻撃の最も困難な部分——惠州の要塞強襲——を《同盟軍》がやらなくてすむようにした。B.K. Блюхер は雲南軍を中央グループへ、できれば北方グループへ向けるつもりだったので、最高司令官の計画の第二部、即ち、軍隊の具体的な配置の審議を次回まで延期することを、彼は軍事委員会に提案した。審議は更に進み、虎門地区を強化するため全広西軍をそこへ移動させ、東江から増城までの地区の防衛は雲南軍に委ねるという提案がなされた。広州軍の第7独立旅団を雲南軍の指揮下におくことが提案された。第2師団と蒋介石將軍の軍隊から成る、広州軍の残りの部隊は広州地区に位置する一般的予備軍となることになった。この提案は軍事委員会全ての賛成を得たが、劉震寰將軍が断固反対した。後に個人的に話した際、劉震寰將軍は B. K. Блюхер に次のように語った。自分は一般論としては、この修正意見に賛成であるが、自分の師団長達は提案されている再編成の実行を拒絶するであろうと思われるので、それに賛成しなかったと述べた。軍事委員会は次の事を決議した：もし陳炯明將軍が今後、積極的に出ないなら、1月の

後半にこちらから攻撃に転ずること。胡漢民は必要な物資を至急調達するよう指示された。

陳炯明將軍は広州に進撃して来るであろうか。Sheng Hongyong 將軍の軍隊が桂林の南に集中し始めたことはどの位危険なものか。北の湖南、江西方面からの脅威があるのか。これらの問い全てに答えねばならなかった。

北方軍閥の軍事的積極性が益々増大したことは勿論、政治的理由によって説明できた。彼らは中国の歴史的進行から孫文の影響力を取り除こうとした。しかし、このためには、広州にある彼の基盤を無くすことが必要であった。中国の全反動勢力が孫文政府と闘うために集められた。広州に対する総攻撃の計画が練られた。

このような状況下で、政府は広州を保持できるか。B.K. Блюхер はこの質問にできると答えた。そして、孫文は居なかったけれども、軍事顧問団長、Блюхер は広州を保持できると政府に断言した。B.K. Блюхер の予想によると、広州に対する北方からの統一的な攻撃はその過程で、一連の困難に遭遇することになるであろう。そして、それによって、敵側の行動の統一が妨げられるであろう。

Sheng Hongyong 將軍の軍隊が攻撃作戦を実行しようとしても、後方の安全が保障されていなかった。彼が梧州を占拠することは恐らく可能であろう。しかし、更に広州に向けて進撃することは危険であろう：背後に、広西の南部を占拠している將軍達の軍隊が現れるであろう。彼らは孫文に対して友好的中立を相変わらず、守っていた。これらの將軍達は Sheng Hongyong に対する怨を晴らすための好機を、長い間辛抱強く待ち受けていた。これ以外に Sheng Hongyong に真の脅威を与えていたのは雲南督軍、唐繼堯の軍隊で、彼はすでに我々が知っているように、雲南に帰って自分の地位を奪おうとしている范石生將軍との、避けることのできない衝突に備えて、より強力になるために広西の一部をもぎ取ることに異存はなかった。

陳炯明の状況もまた華々しいものではなかった。資金が不足していたので、彼は住民から1925年分の税金の大部分を、前もって徴収せざるを得なかった。この封建一軍閥が自分の支配地内のこうした状況から抜け出す出口を探し求めているの

は不思議なことではなかった。

広州出撃のために陳炯明が集められる兵士は1.5万から1.8万にすぎなかったが、実際には、広州軍よりも訓練が行き届いており、また軍事関係の経験豊かな指揮官も備えていた。この程度の兵員の軍隊では広州政府にそれほど大きな脅威を与えることはできなかった。

広州政府を支持していた将軍達の間に対立はあったけれども、孫文は反撃に要する兵力を十分持っていた。

范石生将軍が裏切る恐れは無くなった。范石生は将来雲南省を占領するに必要な兵力と資金を蓄積するために、広州との友好関係を利用していることは明らかであった。陳炯明が広東を占拠した場合、彼はそこに留まっていることはできないであろう。陳炯明は自分の昔からの敵が持っている収入や特権を、根こそぎ彼らから奪い取ってしまうことは疑いもなかった。我々は状況をこのように判断していた：范石生は陳炯明に対し攻撃を仕掛けないうであらう。しかし、広州を守るために戦い、裏切らないであらう。

В.К. Блюхерを何よりも不安にさせたのは政府軍内の各軍団の行動の不統一であった。これを利用して、陳炯明は《同盟軍》を個々に粉碎したり、或いはいずれにしても、彼らに大きな損害を与えることができた。

孫文の内部の敵が行動を起こす危険があるだろうか。反動派達は自分の兵力を組織しようとし始めた。しかし、彼らはまだ重大な脅威には見えなかった。しばらくは、公然たる攻撃は起こらないであろう、と誰もが堅く信じていた。しかし一方、Блюхерは国民党右派が全般的な政治方針を右へ転回すること、それは特に農民問題に関してであるが、それを目的として政府に圧力をかけるために、軍事的困難を利用する可能性があることを忘れないよう我々に要請した。それまで、国民党上層部の農民政策は一貫性に関しても、また左翼の傾向についても目だったものは無かったが、全ての仕事をコミニスト達が行っている国民党中央執行委員会農民部に、干渉しなかった。

ソ連から到着した軍事顧問達は現状を細心に研究するのに忙しかった。多くの事がまだ我々にはよく解らなかった。

読者もわかるように、我々が強行して国民革命

軍の中核を創る際の、我々を取り巻く状況は信じ難いほど複雑であった。М.М. Бородинのある報告の中の極めてエモーショナルな一部を引用せざるを得ない。それは事の本質を明白に伝えている：顧問達がどんな状況のもとで、いろいろな作戦を立て実行しなければならなかったか、を想像するためには、それを形成している要素を全部数え上げるだけで十分である。20万の軍隊が省全体に分散配置している。広東のいかなる場所を指て突こうとも、誰かの軍閥の司令部にあたる。これらの軍隊の主人は数十人の将軍達で、ある者は全く独立しており、またある者は自分達の中で一番強力な人物を中心としてグループを作っていた。匪賊達は自分達の組織を持っていた。それは軍閥と結びついており、また都市で大きな役割を果たしている政治家どもに指導されていた。香港側が支持している買弁達は権力を求めて闘っている；自分の《民団》、村の民兵を従えている《地主》達は農民を服従させている；広東大学は反革命分子の手中にあり、商人達は国民党やその政府を憎んでいる。労働組合は政治に関わるのを恐れて遠ざかっている。都市では、呉佩孚、張作霖、その他北方の軍閥達の代理人があちこち駆け廻り、自分達の党派を作っている。国民党は改組以前、党として機能せず、国民党员は自分達に最大の利益を約束する軍事及び政治の派閥に吸いついている。どの機関にも帝国主義者や北方及び華中の軍閥達のスパイがうようよしている。学生達は時々、自分達の旗を持って街路に出て行き、軍閥や帝国主義者に反対して騒ぐ。農民が組織し始めるや否や、地主達との血なまぐさい闘争が起こり、一方、労働者は自分達の状況が改善されることを要求してストライキを行う。外部から広東を攻撃してきたのは様々な将軍達で、ある者は独力で、ある者は香港に扇動されている。広東——ここは言わば、バビロンの大騒ぎのようなもので、そこでは状況が全く解らなくなる可能性がある。確かに、我々の組織的努力が始まった時の背景は大体このようなものであった。

このような状況から、我々の広州での仕事が危険であるかどうか、の問題が生じる。勿論危険である！特に最初に来た顧問達にこれは当てはまった。何時でも反革命の反乱が起こる可能性があった。現在は誰でも知っていることだが、後の

1927年、張作霖派の連中が北京のソビエト大使館員や北京大学のソビエト市民の教員達を拷問したり、残酷に打ちのめしたりした。同1927年に、広州のソビエト領事館員が射殺された。しかも、これは1925年～1927年の巨大な革命運動の後で起こったことであった。暴力行為は外交官免除特権を持っていた館員達に加えられた。一方、我々は1924年、広州にいた。実際、全く無防備の状態で、大きな危険を伴いながら活動していた。しかし、我々は自分達の置かれた立場の危険性について考えなかった。我々には重大な使命が与えられていた。我々はその深い国際的な意義とその革命的内容を理解していた。そして、自己の義務を果たそうと努めた。我々が一日一日、相当程度、絶えず努力した結果、孫文の軍隊の中に、自己の信頼できる柱、つまり広州の革命親衛隊が生まれつつあった。我々はまた、大衆が孫文の政府に対して益々共鳴していくのを見た。しかし、我々は当時、国民党の指導者達と《同盟》軍の將軍達との個人的な関係が極めて重要であることを考慮することを未だ学んでいなかった、と認めなければならない。

その時からほぼ50年過ぎた。今また、戦線の状況を分析し、記録、極めて多様なメモ、回想録を研究すると、革命の広州の労働者達、広東の農民達、寄せ集めの軍隊の兵士達の間で、若い中国共产党が当時、何如に大きな仕事を展開したかが明らかになる。

B.K. Блюхерの軍事司令官としての才能が大きな事にも小さな事にも表われていること、また彼が軍事的、政治的状况をいかに見事に把握していたかが我々には解った。国民党の右派分子や《同盟》軍の利己的な気質をもった將軍達でさえ、司令官としての彼の一貫した理論に賛同せざるを得なかった。B.K. Блюхерは図式を用いて状況を判断することを好んだ。迷っている人々はB.K. Блюхерの冷静な分析を浴びて退却し、彼の論拠に賛同せざるを得なかった。

それでもやはり、顧問団長の仕事に大きな困難をもたらすような事態が生じた。

孫文や彼の最も近い協力者達は北方軍閥に対して北伐を行う、という考えを重要視していた。孫

文は中国革命の現時点を軍事的進撃の段階と名付けることさえしていた。そして、B.K. Блюхерは孫文が北伐を直ちに実行するように再び要求することを恐れていた。そうなった場合、Блюхерは孫文の計画に断固反対せざるを得なかったであろう。

様々な軍隊から成る国民革命軍の統一が達成されるまでは、北伐を開始することは不可能である、と我々は理解していた。陳炯明將軍が今にも攻撃して来そうであること、広東の状態はどれも不安定であること、政府の財政状態は厳しいものであったことから、成功は期待できなかった。すでに我々が知ったように、北方遠征を始めようとした企画は全く失敗に終わった。北方遠征が軍事行動の過程に於いてではなく、裏切りや軍隊自身の個々の將軍間の衝突の結果、敗北に終わったことは明らかであった。B.K. Блюхерも我々顧問全員も雲南の軍閥達は北伐に参加しないだろう、と確信していた：広州に留まっていることによって、大きな利益を引き出す可能性に彼らは十分満足していた。正にその理由で、北伐の実行を一時的に断念し、その代わりに、陳炯明の汕頭を攻撃するための準備をするよう、孫文を説得することが必要であった。

B.K. Блюхерはこれを自分の仕事の中の基本的な課題と考えた。彼は1月後半、東部戦線で攻撃に移ることを強く主張した。勿論、それは陳炯明將軍がそれ以前に広州を攻撃しない場合のことである。Блюхерは東部戦線の問題を軍事委員会の会議の議題の中に必ず入れた。

我々と話した際、Блюхерは語ったものであった。

——この問題を進展させることができるであろうか。これは何よりも、今や広州に払底している資金を見つける廖仲愷のエネルギー次第である。だが、私は彼のエネルギーを信頼し、中国のコミュニストの活動家を信頼している。そして、後者の助力を得て、我々は国民党の指導者達が東方出撃を開始するよう説得できるであろう。ましてや、私は出撃の計画について予備的な検討を、孫文博士に報告し、それに賛同を得ていたので、説得が可能であろう。東方出撃が成功してはじめて北伐が可能となる。